

第2回 研究部会 実施報告

今回の研究会は「第38回日本の飲食業調査（日経MJ）を読み解く」ことをテーマとして、当会会員でもある白鳥和生さん（日本経済新聞社 編集局消費産業部）と筆者による共同報告が行われました。

まず白鳥さんが日経記者ならではの視点で、全般的動向を解説されました。

全回答企業の売上高総計は3年ぶり増収

上位100社の売上高総計は2年ぶり増収

（前は1974年の調査開始以来のマイナス）

上位100社のうち前年割れは43社

その結果、成長企業に共通している要因が明らかにされました。

「食の安心」に対する消費者の支持の一段の高まり……食材の“見える化”

「宅配」マーケットの取り込み

エンタメ、サービス強化型居酒屋（マルチブランド）躍進

ヘルシー感、チキン（鶏肉）メイン業態

次に筆者がフードサービスの全般的動向について問題提起を行いました。

日本の業界シェアは頭打ちだがアメリカは順調に伸びている

エンタメ性に秀でた回転寿司がファミレスのパイを奪っている

人口統計的にいえばファミレスの復活はありえない

ファミレスは「さすが」というブランド力をつけるべき

その後、報告者とフロア参加者との間で活発な質疑応答がなされました。

たとえばある先生は「アメリカで売上が伸びているのは、そもそも人口増があるためでは？」と質問され、「確かに事実であるが、人口増分もしっかり顧客として引き入れている点がアメリカのすごさ」といった回答がなされました。

またファミリーレストラン企業からの参加者とは「将来あるべきファミリーレストランの姿」について意見交換が行われました。

委員会としては業界の「定点観測」として、日経 MJ の「日本の飲食業調査」に基づいた報告を恒例としていく予定です。

研究会が更に活発になり、学会と業界に資するものになるよう、皆さま方のご指導をいただきながら知恵を絞って参ります。

次回の研究会は話題の「タニタ食堂」について、同社の広報室長・猪野様よりお話をいただきます。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

横川 潤（研究委員会・委員長）